Mr. Jusha Tsumura (1908 — 1997), the Counselor of Tsumura & Co.

under the control. He strongly supported the publication of the Journal of Japanese Botany not only financially but also morally.
（植物研究雑誌編集委員会代表　柴田承二）

新 刊

□田中　馨：**花と昆虫がつくる自然**　197 pp. 1997. 保育社エコロジーガイド. ¥2,400.

前著「花生態学入門（1993）に続くもので，この分野の研究者としてだれもがその実績を認める著者の，新しい知見をとりこんだ記述が各所に披露されている．見開き2頁がカラー写真（そのほとんどが見事な接写），次の見開き2頁がそれをテーマにした解説である．尾瀬ケ原での調査結果などは得難いものである．前著では花の送粉機構に重点があったが，本書ではそれに加えて，表題のとおり，昆虫と花の重なり合った相互関係，さらにそれを保証するための多様な環境の重要性がしばしば言及されおり，アメニティー優先の「自然型環境開発」の問題点を指摘するものとなっている．海水浴場の開発で減少するグンバイヒルガオと，固有種オガサワラクマバチの保護が関係するなどということは，辛抱強い観察の末でなければ発想できないものだろう．同じく小笠原のムニンネズミモチがほとんど結実しない原因は，訪れる昆虫がいないこと，その理由は導入されたセイヨウミツバチの強力な集蜜能力に対抗できず，島に本来いたハナバチ類が減少したため，というような推理も，訪花昆虫0という，一見むなしい観察結果からもたらされたものである．東京白金の自然教育園に，距のない奇形のツリフネソウが増えているというはなしも，たいへん暗示

的である．一種類の植物の健全な種族維持は，その周辺にある花期を異にする多くの種類と，それらを訪れる多種の昆虫，それらを育てる食草や動物の糞や死骸，その元になるいろいろな動物たち，それらに食べられるいろいろな植物や動物，それらを生活させる広い多様な自然あってこそ全うされるのだということが，具体的に理解される．巻末に日本の野生植物の受粉方法の一覧表がある．食物連鎖ばかりでない自然の多様なネットワークを知るために必要な本である．そして環境保全に係わる者ばかりでなく，だれが手にしても，自然への理解の目を一層深くさせる本である．

（金井弘夫）

□鈴木三男，田川裕美（訳）：ポーラ・ルダル：**植物解剖学入門** 197 pp. 1997. 八坂書房. ￥2,600（税別）.

邦題は“植物”解剖学となっているが，原著の標題Anatomy of Flowering Plantsからうかがえるように，実際は被子植物の解剖を扱った本である．その点ではシダ類や裸子植物などの多様な形態を知ることはできないが，これから実態を学ぼうとするものにとっては手軽な入門書である．とはいえ，電子顕微鏡写真を含めた豊富な図版は現役の植物学者にとっても新鮮であるし，単子葉類の形態や，さまざまな二次成長の解説など，わかりやすくためになる部分も多い．また，専門用語のほとんどに原語が付記されており，さらに，巻末に簡単な用語集があるのでこれ一冊で形態学の基本用語はかなり身につけることができる．好感の持てるコンパクトさは，しかし，多くの点を割愛する必要に迫られる．本書ではできあがった形態を中心に解説しているので，発生と形態形成という点ではほとんど見るところがない．致し方のないことである．

カバーの折り返しにある「本書の特色」には，通常の植物関連の学問分野以外に，薬学，考古学，美術デザイン分野まで役に立つというお奨めが載っている．研究者の減少で，大学で形態学を学ぶことが難しくなりつつあるが，逆にさまざまな分野で形態に興味を持つ人は増えているかもしれない．そうした人たちも含めて，手軽な入門書である本書は便利であろう．初版では「並層分裂」が「平層分裂」となっている．訳者はその道のプロであるので，善意に解釈すると，ワープロ原稿の段階でこうなった可能性がある．紹介者もかつて「珠孔」を「珠口」としていてあわてたことがある．時代の罠であろうか．

（西田治文）

□Hickey M. and King C.: **Common Families of Flowering Plants** 212pp. 1997. Cambridge University Press, Cambridge. £ 14.95 (paperback); £40.00 (hardback)

本書は2部構成になっている．最初の部分では，植物の形態についての教科書的な記述がなされている．形態を説明するのに多くの図がつかわれており非常にわかりやすい．植物な形態は小中学校で習ったおぼえはあるが，その後きちんとした教育を受けていない人がほとんどであると思う．植物分類学や植物形態学を専攻する人には少し物足りない部分もあるが，ひととおり植物の形態を理解するには十分である．第二部は，食用，薬用，鑑賞用等経済的に重要でかつまた生態学的にも注目される25の科を選んで，それらについて，分布，科の形態学的特徴，有用性，分類体系が示されている．分類体系は一般的なものを使用しているが，誰のシステムかハッキリさせたほうが良いと思う．それぞれの科は，1ないし数種の代表的な種を取り上げ分布や形態が記載されている．ここでも解剖図を中心にふんだんに図が用いられており，各図ごとにテキストで丁寧な説明がなされている．ただし，図に直接用語がつけられていないものが多く，植物形態学の知識をある程度もっていないとどの部分の説明をしているのか解りにくい例もある．25の科の記述のあとに文献と用語の解説がつく．本書は植物形態学というタイトルが付けられていないが，ねらいとしては，植物の形態を具体例で示し，その変化のおもしろみを感じさせることにあると思う．

（寺林　進）